

ニューヨークにはまだジョン・F・ケネディー空港はなく、ラガーディア空港に着いた。ハワイでは日本人の学生と生活していたが、ニューヨークでは英語漬けである。外国で英語をしゃべると、間違っても相手はわかってくれるから、何でもしゃべれる。日本の学校では間違いはいつも減点の対象だから、つい臆病になる。はじめの半年はブルックリンの学生寮で過ごした。寮には学部の学生もいて、日本の学校で使っていた模範的な英語だけでは暮らしていけないことが分かった。

例えば four-letter word である。日本でも子どもが幼稚園に行くようになると、友達から悪い言葉を覚えてお母さんにしかられるということがあがるが、若い学生の会話のなかには four-letter word (4文字語) がしばしば出てくる。覚えなければならぬというほどのことばではないが、知らないとう会話成り立たない。

放送禁止用語のようなもので、引用にあたっては注意しないとイケないことばだが、「この文章のなかには放送にふさわしくないことばもありますが、生きた英語を伝えるために、そのまま引用します」とでも断りを入れて許してもらうことにする。

Fuck、shit、damn などでもいずれも四文字であることから four-letter word と呼ばれている。Fuck you とか son of a bitch (SOB) などということもある。“It’s fucking cold.” とか “It’s fucking boring.” などと軽い意味で使うこともある。日本語では「今日はクソ寒いや」「これはクソ面白くもねー」とでもいうところか。

あるときアメリカ人の学生から「日本語にはどんな four-letter word があるか」と聞かれたので「馬鹿野郎！ you fool かなあ」と言ったら、そんな上品なことばしかないのかと聞き返された。後から考えれば、日本語にも「くそつたれ」とか「こん畜生」というような下品なことばもあるが、その時は思いつかなかった。日本語には God damn のような curse word (神を呪うことば) はない。キリスト教圏ほど神に対する冒瀆という概念がないため、その類のことばが貧弱であることは確かであろう。ロシアの小説など読んでみると「豚野郎」とか「あばずれ」などということばが豊富に使われていることが、翻訳を読んでも伝わってくる。

あるときグリニッジ・ビレッジの本屋をのぞいていたら four-letter word の本を売っていたので、それを買ってひそかに勉強した。使わない方がいいことばではあるが、知らない人に聞くわけにもいかない。帰国後その本を友人に見せたら、友人は会社のゼロックスでそれを全部コピーしたようである。

どこの国でもことばあそびがある。ボブ・ディラン作詞作曲でジョン・バエズが歌った歌に“Love is just a four-letter word”というのがある。また、“Work is a four letter-word. People say you were born lazy, because you think that work is four-letter word.”なんていう冗談もある。

日本人の英会話の元祖はジョン・万次郎だろうと思う。ジョン万次郎には『英米対話捷徑』という本があって、万延元年の遣米使節もこの本で勉強したらしい。最近では『ジョン万次郎の英会話』(J リサーチ) でファクシミリの復刻版も出ている。

Good day Sir.
グーリ デイ シャアー
善 日で ござる
How do you do Sir.
ハヲ ヅー ユー ヅー シャー
いかが ごきげん あなたさま よふ ござるか

『英米対話捷徑』では返り点やレ点を使って、英語を漢文のように読み下している。

You may say what you please.
ユー マイ セイ フッチ ユー プリージ
あなた ベしレ いふニ 何にても あなたの ころにあることを一

ジョン万次郎は、英語を日本語の語順に変換しているばかりでなく、発音もみごとに日本語式に変換している。

I am sorry to hear that your Grandfather is sick.
アイ アム ソレ ツ ヘヤ ザヤタ ユーア グランダフワザ イジ セッキ
わたくしは きのどくにおもふレ ことをレ きくニ その あなたが 祖父(ぢぢさま)
の あると一レ やまひで
Is your Father any thing better than he was this morning?
イジ ユーア フワザ エネ センキ ベタ ザン ヒー ウワーシ ゼシ モーネン
ありや五 あなたの ててごは いささか三 ころよく四 よりもニ かれの すぎし
今(この)朝(あさ)一
No, I think he is rather worse.
ノー アイ センカ ヒー イジ ラザ ウワーシ
否(さふでない) わたくし おもふに かれ あるニ すこしづつ あしきかたで一

これでは大学入試センター試験に合格するのはむずかしいかもしれない。しかし、これが咸臨丸の時代第一級の通訳であったジョン万次郎の英会話である。通じるのである。会話ではたくさんの単語を覚える必要はない。少ない単語の多様な使われ方を覚えるのが肝要のようである。

簡単な単語だけでも十分英会話はできる。わからないことがあったら、相手に聞けばいい。赤ちゃんだってお母さんのいうことを聞くだけで、自分の意志を相手に伝えることができ

なければフラストレーションがたまってしまうのではなからうか。赤ん坊はことばが通じなければ泣いたり、全身を使って自分の意志を伝えようとするだろう。「チガウチガウ。ソウジャナイ。チガウチガウ」。

アメリカ人は自分の意見をはっきりいう。しかし、議論の仕方はある種の洗練された社交術を身につけていて、決して相手の人格を傷つけたりしないように気を配っている。だから議論をしても仲たがいになったりすることはない。

ある時「小林は英語でケンカする」という噂が広がったことがある。私が外国人と議論しているのを聞いた人が広めた噂である。日本人は意見がちがうときは、できるだけ結論を曖昧にして対立が起こらないようにする傾向があるが、外国人は議論を深めようとする。そういうときは決して four-letter word など使わない。外国で暮らしていれば、価値観の違いで議論になることもある。あるいは、森鷗外のように恋に落ちることもあるかもしれない。しかし「小林は英語で愛をささやくことができる」という噂は残念ながら、いまだに聞こえてこない。

私の好きな英語に“Take it easy.”というのがある。Take も it も easy も中学校で習ったはずだが、いろいろな場合に使われるので、はじめはその意味が分からなかった。「肩の力をぬいて、気軽にやれよ」というような意味だと思う。これをアメリカ人は、日本人が「頑張れよ」というようなシチュエーションでも使う。そのニュアンスが分かるまでには時間がかかることもある。

◎お詫びと訂正

前回「あこがれのハワイ航路」で田崎先生は氷川丸でシアトルという航路ではなかったか、と書きました真実は次の通りです。

「私の頃は、渡米方法は3種類でした。一般留学生は氷川丸、教員研修留学はアメリカン・プレジデント・ライズ客船、大学教員は飛行機。私は、したがってハワイ経由の豪華客船がはじめてのアメリカでした。」

ということでした。田崎先生と同じ頃留学した小田実は学生だったので、氷川丸だったようです。

【予告編】

第4話 ニューヨークの日々

第5話 海に火輪を

第6話 Back to 1960's

第7話 帰国—日本文化圏再突入

第8話 アメリカ再訪

第9話 アジア回帰

第10話 アメリカ NOW